カナダ人物記⑤

バレエ界のスーパースター
カレン・ケイン

一九八〇年秋のブロードウェー。ユリス劇場の舞台裏では、カナダ・ナショナル・バレエ団の花形カレン・ケインが、成功だった昨夜のライモンダ・パド・ディスなど関係ないかのように、心許無げに故郷トロントを思っていた。「知らない町にいると、落ち着けないのです」と、ケインは言いわけがましく語る。

ケインのホームシックは、有名である。彼女は、あまりカナダを離れたがらない。ルドルフ・ヌレーエフ、エリック・ブルーン、ナタリア・マカローバといった超一級のバレエスターを継ぐと言われるほどになった今でも、巡業中、〝持病〟のホームシックが頭を持たげる。

カレン・ケインは、ダンスの天分に恵まれながら、その才能を扱いかねている、野心の薄い不思議なスーパースターである。

カレン・ケインは、一九五一年、オンタリオ州の小さな町アンカスターで生まれた。トロントのナショナル・バレエ学校に入る頃から頭角を現わし、六九年、十八歳でナショナル・バレエ団に入団。早くも翌年、プリマ・バレリーナになり、バレエ界の巨匠ヌレーエフとブルーンのコーチを受けるようになる。ヌレーエフは彼女をお気に入りのパートナーとして選び、世界各地で華麗なデュエットを展開。七三年、ケインはモスクワ国際バレエ・コンクールで銀賞を獲得する。

ケインのリハーサルを偶然目にしたフランス・バレエ界の大御所ローラン・プチは、すぐにフランスでの客演を決定し、彼女のために「心の憩い」(七四年)、「コッペリア」(七五年)、「ナナ」(七六年)などの大役を用意した。いつもは冷静なパリの批評界もこぞってケインを絶賛し、彼女は国際的なスターとなった。

しかし、彼女自身に強烈な目的意識があったわけではない。ケインはただ、周囲の意向に素直に従っただけである。息つくひまのない巡業に彼女は消耗しきり、七七年一月のロシア公演の後、ついに彼女は病気になる。以後カナダから一歩も出ようとしなくなった。国内での公演は続けていたが、うまく踊れず、酷評を浴びる時さえあった。彼女は、完全なスランプに陥っていた。

カレン・ケイン

そうした状態が三年間続いた後、パリに現われたケインは、再起の決意を固めていた。

厳しいレッスンを再開し、出演交渉がくるのを心待ちにした。状況は厳しく、ゴランクを埋めるのは難しかったが、ついにプチがフランスでの「コッペリア」の役を提供してくれた。

八〇年三月のこのフランス公演は、彼女にとって今までにない試練となった。教師もつかず、パートナーもおらず、自分の昔の「コッペリア」を収録したビデオを唯一の教師にして、ガランとしたマルセーユのスタジオで、ただ一人、練習を重ねた。マカローバもヌレーエフもプチも頼りにできなかった。この孤独な闘いを通じて、彼女は自分と自分の芸とに最も真摯に向き合い始めたのである。

三年ぶりの海外公演は、大成功だった。ケインのドラマ性と基礎の確かなテクニックとが見事に結びつき、プチは新しい「コッペリア」に感激した。これを契機に、プチは、妻ジジ・ジャンメールを継ぐプリマとしてケインを考えるようになる。

カレン・ケインは、米国、欧州、中国、——と世界各地の公演に忙しい。日本でも、去年の秋、ヨハン・シュトラウスの「こうもり」を踊った。カナダでは、テレビのミュージカル・ショウなどにも気軽に出る。人気、実力ともにナンバーワンのスーパースターだが、持病のホームシックだけは、いまだに治らない。彼女にとってカナダ、そしてトロントほど良い場所はない、というわけである。

(本文は「マクリーン」誌を参照した)。

編集後記

○「ある国には歴史があり余るほどにあるが、カナダには国土があり余るほどある」——と述べたのは故マッケンジー・キング首相ですが、この広大な国を統合し、発展させる基盤となったのは、何といっても交通・輸送です。カナダにおける交通・輸送の歴史は、カナダの歴史そのものといってもよいでしょう。

○今回は、この重要な交通・輸送を特集してみました。カナダにおける貨物および旅客輸送の現状と、今後の方向について、その概要がお分りいただけたと思います。

○カナダは、交通・輸送の研究開発に力を入れており、さまざまな輸送手段や技術を開発してきました。新型ジェット機、高速電車、雪上車、砕氷船など、いくつかの例を取り上げてみました。

○当広報部では背景説明「カナダの鉱業」「一九八二年カナダ憲法(条文仮訳)」を発行しました。ご希望の方は、はがきでお申込み下さい。

(吉田)

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒107東京都港区赤坂七丁目三—三八
カナダ大使館広報部